

呼吸とリズム

～ 個体発生は系統発生を繰り返す ～

大畑 昇

(北海道大学学生相談室長・大学院歯学研究科教授)

一 はじめに

私たち学生相談関係者は、ひょっとすると、グローバルな教育史の新たな転換期に立ち会っているのかもしれない。もしそうだとすれば、なかなか刺激的で大変興味深いことではないだろうか。そもそも学生相談とは大学という組織の中では生まれも育ちも地味であり、地味であるからこそ学生にとっては存在価値があったのではないかと思っっている。物事は必ず表と裏があり、一方から光を当てれば反対側には陰と影ができる。光と陰と影の世界、我々人類が社会を意識した時から始まった宿命である。日陰のない砂漠

では生きられず、かといって光のない暗闇の世界をも恐れる。

競争社会とは評価という光を強くすることであり、当然、陰と影は暗くなるのである。人間は訳が解らないところがあれば確かめてみたくなるのが人情である。そのように考えて陰と影に光を当ててみたら、陰と影は消えていた。陰と影の世界の人々は、とっくに新たな陰と影の場所に隠れており、一人残った人間がいたので皆でその理由を聞いた。その人間は惘然として答えた「木陰でただ休んでいただけだ。それなのに、いきなり木陰をなくしてしまったのは理不尽だとは思わないのか？」

そこで考えたのが間接照明法である。直接光を当てず、天井や壁の反射光を利用する。優しい照明の下ならば怒り出す人間も少ないであろう。今回の学生相談特集はそんな雰囲気を感じるのである。

『大学における学生相談体制の充実方策について―「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」―』が本年三月に出され、引き続き四月一日に学校教育法施行規則等の一部を改正する省令「大学設置基準第七条二項：学科目制・講座制に関する規定を削除し、各大学が、教員の適切な役割分担と相互の連携体制を確保し、教育研究上の責任体制が明確になるよう教員組織を編成するものとする」が出されたのは、どう見ても最初から仕組まれたものと考えるのが大学教員としての素直な意見である。

平成一二年に「大学における学生生活の充実方策」（廣中レポート）が出された時、筆者が教員の立場で読んだ感想は以下のように単純なものであった。少子化で受験生が減り続け大学全入時代が来る。その時生き残れる大学は「教員中心の大学から学生中心の大学へ」教育改革できた大学である。学生委員の立場ではその位にしか考えていなかった。

むしろ入学者選抜制度調査委員会の委員でもあった筆者

り前である。以上の事柄は全て関連している。当たり前である。だから大昔の偉人は言った「太陽の下、新しきものなし。」と。それを解っているからこそ人類は教育を大事にしてきたのである。この当たり前を真面目に教育するために大学というものまで作ったのである。

ところで、呼吸は呼と吸とに分けられるが、どちらが大事故か？と学生に質問する。学生は「教わっていないから知りません。」と答えるに違いない。そこで怯まずに「では、呼と吸と同時にできるのか？」学生「同時にはできません。」筆者「同時にできないならばどちらかやるしかない。何故なら呼吸を止めたら死んでしまうからだ。もう一度聞く、呼と吸を止めたら死んでしまうから。」

多数の学生が手を上げる。筆者「呼だと思っ学生はいるか？」二〜三人が手を上げる。筆者「正解は呼である。正解した学生はどの分野でもリーダーになれる器量を持っていると予言しておく。何故なら、世界中の健康法とは呼吸法だからである。ヨガでも太極拳でも呼つまり最初に吐き出すことを訓練するからだ。ところが素人は吸うことを先にしてしまう。だから息詰まるのだ。知識を貯めこむ受験勉強の癖から抜け出すことをしないと、健康を害してしまうぞ。」ここで強引に学生相談に話を結び付けるところが筆者の

は受験生をいかに確保し維持するかが大きな課題であり、多様な選抜方法を大学として確立する役割に翻弄されていた。筆者はその当時、学生相談とは無関係で、無関心な学部の一教員に過ぎなかったのである。

廣中レポートを読んだのは平成一四年学生相談室長になってからである。そして、「大学における学生相談体制の充実方策について」を読んだのは原稿依頼がきてからである。カウンセラーでもなく精神科医師でもなく歯医者に過ぎない筆者が「大学と学生」に論説を寄稿するはめになるのは、筆者自身が一番戸惑っている。仕様がなから間接照明の反射板と覚悟を決めて学生相談を歯学部教員の立場で書かせていただく。筆者の癖つまり反射板の地が出てしまいい講義調になるのは御容赦いただきたい。

二 呼吸とリズム

生物は動物であれ植物であれ生きるために呼吸をする。当たり前である。生き物は生きるために必要な食物を食べ、いらぬものを排泄する。当たり前である。自然は春夏秋冬のリズムがある。当たり前である。地球は二四時間に一回自転しながら太陽の周りを一年かけて回っている。当た

り前である。この呼吸法を忘れ、心の悩みに嵌まり込んだ学生をどうすればいいのか。先ほどの手を上げた二〜三人（二八〇人クラスの五％）は教職員が全く手をかけなくても大丈夫な学生である。次に、吸に手を上げたり上げなかったりした大多数の学生達こそ教員が相手にする学生達である。問題はこの講義を欠席した学生が必ずいることである。授業をサボってサークル活動やバイトに精を出している学生もそれほど心配することはない。教員よりも職員を信頼している学生達である。実は最大の問題は大学に來ない引きこもりの状態の学生が二〜三人（クラスの五％）いるということである。専門的學生相談と連携が必要な学生である。そのような学生を専門的訓練を積んだカウンセラーに繋げるのが教職員としての日常的學生支援である。

実際の現場ではこの連携こそが最も困難なのである。だからこそ制度化された学生支援が必要とされるのである。最初は学生相談の右も左も解らなかつた素人の筆者が学生相談室長の六年目になると、学生相談の修士課程卒業位にはなれるのである。制度としての学生支援の効果である。制度の原則として必要なものは何か。必ず交代するといふ決まりである。これをど忘れて問題だ問題だと騒ぎ立てれば、システムは崩壊する。その典型的な例が地方の地

域医療の崩壊である。医療を経済効率で評価し、改革という名のもとに現場を知らない人間が手を加えれば、弱肉強食・吸収合併が起こる。一番被害を被るのは常に弱者の地域住民である。では今回の「大学における学生相談体制の充実方策について」の試みが失敗したら誰が最も被害を被るのか、今や大学では最も弱者となった我々大学教職員に他ならない。

三 個体発生は系統発生を繰り返す

学生生活サイクルの概要（報告書八頁：図一一）を見た時、最初に思い付いたのが動物学者ヘッケルの唱えた生物発生原則「個体発生は系統発生を繰り返す」である。だからサブタイトルとさせていただいた。

考えてみれば大学教職員のほとんどが昔は大学生であつたはずで、大学生は高校生であつたはずで、高校生は中学生であつたはずで、中学生は小学生であつたはずである。さてここで我々大学教職員に問題を出してみる。初等教育、中等教育、高等教育で心の育成にはどの時期が大切か？ 大方の意見は初等教育と答えるに違いない。根拠は漫画「ちびまる子」の愛読者が小学生だからである。映画「千と千

尋の神隠し」の圧倒的支持者が小学生だからである。『明恵夢を生きる』の中で河合隼雄氏は「一二、三歳において人間は子供なりに老成するのであり、しかもその完成は性衝動との対決によってたちまちに破壊される、という予感をはらんでいる。」と解説しているからである。

しかし、初等教育の教諭はこういうであろう。「小学校に入ってからでは遅い。親の躰の方が大事だ。」と。

独断的結論とすれば「三つ子の魂、百まで」。三年周期で人の心は繰り返し成長する。学生生活サイクルの概要の最後の期「社会性形成への支援」とは、次の時期への準備期であると思えば、「個体発生は系統発生を繰り返す」に見事に当てはまってしまうのである。

四 総合的學生支援と専門的學生相談との連携・協働の可能性

この課題こそ我々学生相談関係者に突きつけられた問題である。教職員の教育システムと考えれば今流行のFD研修会に他ならない。三年周期で考えれば三年目で個々の部局・学科で総合的學生支援のマネージャーが養成できることになる。もちろんFD研修会の講師は専門的學生支援機

関の担当者が行わなければならない。

廣中レポートが何故ここまで日本の大学に影響を与えたか？それは廣中氏が大学学長であつたからである。だから全国の学長、副学長が意識改革できたのである。

では、今回の報告書を独断で仮称「学生相談レポート」と名付けてみる。その理由は「学生相談を大学教育の一環として位置付ける必要がある」（廣中レポート）を形にしなければならぬからである。だから学生相談室関係者は各大学の事情に合わせて、どのような形で連携・協働システムを構築したかが、問われるのである。中期目標・中期計画に基づき、平成一九年度実績報告書作りが始まったかと思うと、また自ら仕事を増やしてしまったと反省している。自分の癖は一生治らないと諦めるしかない。

五 おわりに

今回は教員の立場で非専門分野の学生相談を書かせていただいた。だから多くの専門家の意見を我田引水して私見を述べたに過ぎないものと思っている。学生にとっては最も面白い講義の典型と反省している。

そこで最後に筆者が専門分野の教員として、「学生の個

別ニーズに対応した学生相談」についてどのように考えているかを紹介したい。

「教師は学生の顔と名前を覚えなければならない。」「患者様だから〇〇様と呼ばなければならない。」「教務委員長タイプの秀才同僚からよく言われる。筆者は名前を覚えるのが苦手だから最初から覚ええない。臨床でも患者さんの名前は覚ええない。」「それでよく教員や歯医者が務まるな。」「と言われている。反論しても無駄だから黙っている。しかし、この優等生タイプの弱点は何か？自分が知らないことではないと思っていることである。何でもできると思っていることである。小学校時代から先に述べた上位5%以内で、いつも褒められて育った秀才だからである。こういうタイプは学生相談には向かない。学生がどういうことを話しか忘れないからである。そして学生とすれ違う度に名前を呼んで「〇〇君、元気でやっているか？」、病院内では患者さんに「〇〇様、お加減はいかがですか？」と声をかけるからである。つまり人は目をかけてあげれば、がんばれるのだと思ひ込んでいからである。それをまた周囲に自慢するからである。

一方、筆者はその学生が何を話したかは直ぐに忘れる。患者さんが何を話したかも直ぐに忘れる。そのためメモ

けは取る。患者の場合はカルテに書く。廊下で会っても学外で会っても、相手が挨拶したら目礼だけで済ませます。しかし、頼まれたら時間の許す限り何回でも付き合うことにしている。実習でも往診でも、できる限り付き合っただけ。それができるのは、全員から頼まれることはないからである。あっても前述した5%以内だからである。

では最後に、その秀才タイプに意地悪な質問をする。酒の席みたいな軽い冗談で済ませる方が無難であろう。「多様な学生の個別ニーズに教員が対応するには一クラス三二人であれば可能なのか？自分にはとても無理だけど」と。現在六〇人クラスでもやっているのだからもちろん可能だと答えるに違いない。「では聞くが、授業に全員出席した場合は一通り、一人欠席した場合は三二通り、このように考えていくとクラスの出席様式は何通りあるのか？もちろん全員欠席の場合も一通りである」と。電卓があれば何とかなると言ったらしめたものである。「何桁の電卓か？自分はいつも一日の診療費を計算するため電卓をポケットに入れていた。十桁だけでも間に合うかな？」とポケットから取り出す。「降参する」といっても言わなくても早めに答えてあげる「約四三億通り」であることを。ちなみに正解は四二億九千四百九十六万七千二百九十六通りである。二の三

二乗である。

何で三二なのだと言問されれば、「自分は歯の欠損の専門家つまり義歯専門家だ。人間の歯は親知らずまで含めれば三二本である。これまで同じ歯に出会ったことはないよ。」たかが歯医者、されど歯医者である。歯医者の世界もグローバルで結構楽しいものだと言学部学生に知ってもらえれば大学教員としては十分だと思っている。